

柳井の「金魚ちょうちん」は、江戸時代の後期に津軽地方で生まれた「金魚ねぶた」が西廻り航路の海運によって運ばれて柳井津にもたらされ、現在の形に発展してきたものである。

柳井の「金魚ちょうちん」は、古くは灯火玩具の類であったために、職人の作品ではなく素人の庶民が暇を見つけては子供のために作ったもので、形態は作り手によって多少の違いがあったと考えられる。しかも、飾っておく作品ではなく、毎年夏の行事に際して子供たちが持って消耗していく玩具であったから、作品は永くは残らなかった。製作技法や製作者などについて、古文書ではなく口伝による情報なので、確たる歴史を把握することは難しい。

以下に口伝などを総合して、「金魚ちょうちん」の歴史を記述する。

1 津軽藩（弘前藩）での金魚飼育

江戸時代が経過するにしたがって、幕府も各藩も財政が厳しくなり、支出を抑えるとともに収入を増やすために殖産振興に力を入れるようになる。飢饉の被害が大きかった津軽藩では、新田開発をすすめながら、漆や楮の栽培あるいは陶器製作などを奨励した。また、他所から各種の魚を取り寄せて養殖も行っている。

そうした折、上方から「金魚」を移入して養殖をし、品種改良を行って、成魚を他藩へ売却して財政再建の一助にしたいと考えたようである。藩は明和年間（1764～1772）に斎藤勘蔵と柿崎何某に命じて、金魚の飼育を始めている。しかし、利益を生むまでには至らなかった。やがて文化年間（1804～1818）になると、庶民にも金魚の飼育が許されて、急速に広まっていく。

こうした藩が主導する改良努力の結果、金魚の新品種が生まれた。「津軽錦」である。郷土津軽にしか存在しない「津軽錦」に、津軽の人々は愛着を持ち、誇りとした。その思いを込めて、灯火玩具の「金魚ねぶた」が生み出される。「ねぶた」と称するが大型の山車ではなく、「ちょうちん」の大きさである。

2 金魚ねぶたの登場

江戸時代の後半期に、灯火玩具である「金魚ねぶた」が津軽藩で誕生した。「津軽錦」は、尾ひれが大きく、背びれがなく、程よい丸みのある体形をしており、その特徴を灯火玩具の「金魚ねぶた」に移している。津軽で品種改良をした「津軽錦」への愛情が入り混じっており、郷土の誇りが感じられる。

「金魚ねぶた」が誕生する経緯には諸説があり、そのいくつかを紹介しよう。

金魚を弘前城下に移入して養殖と品種改良に取り組んだ頃、金魚を初めて覗き見た弘前の庶民は気味悪がったという。尾ひれは大きく裂けて、背びれがなく、毒々し

い赤色をしている。噂は噂を呼び、たちまちのうちに不審情報は広まった。心配した武士は、金魚の玩具を作って子供たちに配布した。案の定、子供たちは手にして喜び、遊びに使った。金魚に対する不安感は失せていったという。

また別の説として、藩主の寵愛していた魚が死んでしまい、藩主が塞ぎ込んでしまった。元気を取り戻してほしいと「金魚ねぶた」を家臣が作って慰めたことが、誕生のきっかけであったとも言われている。

さらに異説として、葬儀屋が提灯などの葬式用具を作る傍ら、副業として「金魚ねぶた」を作り、売り歩いて収入の一部にしたという。

他に、金魚には関係しない疱瘡除けの御守であったとの説まである。幕末に西洋から種痘が導入される以前には、治療法のなかった疱瘡は実にやっかいな感染症であった。高熱を発し、身体は赤くむくみ、死に至ることもあった。神仏の加護を願い、疱瘡魔の身代わりとして「金魚ねぶた」が誕生したとの推測である。津軽の「金魚ねぶた」には目の周囲に斑点を描いているが、疱瘡も同様の発疹が現れる。

津軽の「金魚ねぶた」誕生の時期は、正確には把握しがたいが、江戸時代後期であろうと推測されている。明治時代の話として、夏にねぶたの山車を引き回す時、引き回しを待っている人々は、波を描いた台を家門に置き、台の上にとらいを乗せ、とらいの上に「金魚ねぶた」を掲げて水に映った金魚の姿を愛でたと伝えられている。また、高度成長以前までは「金魚ねぶた」を持った子供たちが、引き回される山車ねぶたの後ろをついて歩いていたと言われる。

3 西廻り航路の隆盛

江戸時代の後半から明治時代にかけて、北海道や日本海沿岸の産物が、北前船による西廻り航路によって瀬戸内海や大阪・京都にもたらされた。その西廻り航路は経済ルートであるとともに、文化ルートでもあった。沿岸の港町には、大量の富がもたらされるとともに、北方からの文物も移入した。

西廻り航路にあたる沿岸には、津軽の「金魚ねぶた」が伝来している。新潟の新発田では、大型の金魚を作って山車に載せ、多くの子供たちが引き回している。それを小型化し、「ちょうちん」風の灯火玩具にもしている。ちなみに、同じ新潟の三条、村上、巻町では「鯛」を山車に乗せた形の灯火玩具がある。「金魚ねぶた」にヒントを得て、地元で水揚げされる鯛に替えたのであろう。

柳井津の豪商たちは、自ら回船を所持して日本海岸にも出向いて売買を行い、大いに繁栄した。江戸時代に繁栄を謳歌した柳井津は、岩国吉川藩の御納戸と呼ばれた。岩国領の経済活動の要を担っていたのである。扱った商品は柳井の特産品である、菜種を絞ってつくる灯油、「柳井縞」などの綿織物、製塩にともなう醤油などであった。そうした活気あふれる柳井津には、日本海沿岸の玩具や風習も伝わって来た。柳井津の回船が津軽にまで足を延ばした記録はないが、北陸までは足繁く通っている。津軽

の「金魚ねぶた」は、日本海沿岸の港町を經由して、間接的に柳井津に伝来したのであろう。柳井津の町人たちは珍しい文物を抵抗なく受け入れ、楽しんだ。

最近のことではあるが、「柳井金魚ちょうちん」にヒントを得て、柳井市大島では「鯛ちょうちん」がお目見えしている。

4 柳井への金魚ちょうちん伝来

西廻り航路の海運によって、津軽の「金魚ねぶた」は柳井津に伝来した。柳井津の町人は、それを真似て「金魚ちょうちん」を製作した。伝来の時期は、幕末であろうと言われている。

津軽の「金魚ねぶた」と柳井「金魚ちょうちん」は、名称が違うだけで、その系統を引き継ぐものである。当初の柳井「金魚ちょうちん」は、津軽「金魚ねぶた」に酷似して、口は横長く、尾ひれは立ち上がっていた。

5 「柳井の金魚ちょうちん」を誕生させ継承してきた人々

「金魚ちょうちん」は、竹ひごを組み合わせて骨格とし、和紙を貼り、赤の染料で胴部を着色し、黒の染料で眼を入れる簡素な玩具であるから、高等技術を必要とせず、多くの子供たちが所持したものである。特定の人物だけでなく、多くの人々が製作したと察せられるが、ここでは言い伝えられている製作者のみを紹介する。

幕末に「津軽ねぶた」が柳井津に伝わってすぐに、それを真似て作った人物が、熊谷林三郎である。熊谷林三郎は柳井津古市で「さかい屋」の屋号で染物業や蠟燭業を営んでおり、柳井縞やろうけつ染めの製作に携わっていた。「さかい屋」の林三郎であることから「サカイリン」と称した。「金魚ちょうちん」を製作する際の主な材料は、竹ひごと紙と染料と蠟である。熊谷宅には「ちょうちん」の材料である染料と蠟が手元にあったことから、「金魚ちょうちん」を作ってみようと思いついたのであろう。蠟を必要とする理由は、蠟を赤地と白地の境にあらかじめ塗っておき、境目を際立たせるためである。

熊谷林三郎の息子である宮本定治氏は、亀岡町で「サカイリン」看板業を営んだ。定治氏は熊谷家で育つ折、「金魚ちょうちん」の作り方を親である林三郎から直伝されていた。林三郎の死後、宮本定治氏は看板作りの家業に精を出す傍ら、暇を見つけては「金魚ちょうちん」作りに励んだ。さらに、定治氏の息子である美佐男氏も看板業を継いで、「金魚ちょうちん」を作った。宮本美佐男の孫は、福田姓を名乗って小間物屋を営んだが、「金魚ちょうちん」は作らなかつたと言われている。

次に技を継承したのは、本町通りで洗い張り業を営んでいた長和定二氏である。長和家は、定二氏の親が一家を引き連れて防府の三田尻から柳井へ移住し、染物業を開業した。初め定二氏は染物業を手伝っていたが、宮本美佐男氏の看板店に就職して、絵描き修業をしている。その時に美佐男氏から「金魚ちょうちん」の作り方を教わっ

た。長和定二氏は後に本町通りから金屋町に店を移し、そこで本業を営む傍ら「金魚ちょうちん」を作って、夏祭りの夜店で販売をした。なかなかの好評で多く売れたが、第二次世界大戦中に余儀なく販売を中止した。戦後、再び売り出したものの、さっぱり売れなかった。

戦後の窮乏によって子供たちが「金魚ちょうちん」を手にしなくなり、継承が途絶えた状況にあって、大島郡大島町小松在住の上領芳宏氏が優雅な「柳井金魚ちょうちん」に魅せられ、復活に乗り出した。長和定二氏が作った「金魚ちょうちん」を分解し観察して、忠実に再現をした。長和定二氏が入院している病院を探し出し、「復活ちょうちん」を携えて病床を訪れたが、技法を教授するだけの体力は定二氏にははすでなく、ただ「金魚ちょうちん」復活の朗報を喜ばれたそうである。彼から譲り受けたいくつかの「金魚ちょうちん」が、さらに芳宏氏の師範となった。上領氏は、作品を土産店に置いてもらう努力をしたり、継承者を育てるために実技指導を度々行った。

周防大島町西屋代在住の中原勲氏も「金魚ちょうちん」に魅せられた一人で、長和定治氏の「金魚ちょうちん」を手本にして、再現をしている。その作品は現在、柳井市しらかべ学遊館に展示してある。

また、伊保庄公民館長の干出氏も再現をしている。そして彼は、公民館活動の一環として子供たちに「金魚ちょうちん」の作り方を伝授している。

その作り方講座には、途中から小学校の教員であった河村信男氏が加わった。信男氏は「金魚ちょうちん」の普及に併せて、効率的な製作をするに適した形に進化をさせた。形と彩色の変化は、「柳井の金魚ちょうちん」を一層愛嬌に満ちたものにしていく。時あたかも、「町づくり村づくり」の機運が盛り上がった時期で、作成体験講座を頻繁に開催するとともに、全国各地で行われる地域情報発信イベントに派遣され「柳井金魚ちょうちん」の作成実演を披露して、PRに努めた。柳井のお土産として日本全国に広く認識される契機になった。河村氏の亡き後、残された家族が「河村信男工房」を設立して、氏の業績を伝えている。

6 「金魚ちょうちん」の変化

柳井川の三角橋近くで開業していた佐藤医院に、古い玩具が多く保存されていた。その中に「柳井の古い金魚ちょうちん」があった。伝来当初には立ち上がっていた尾びれが、垂れ下がった段階のものである。佐藤医院保管の「金魚ちょうちん」と現在のものとの比べると、所々に違いが認められる。相違点を列挙すると、①眼を小さく三重に描いていたが、現在では大きな二重眼に変わった。②口は横長楕円に描いていたが、円形になった。③横に付けたひれは、長くなった。④鱗は赤色で写實的に表現していたが、今では黒色での簡単な格子模様に替わった。⑤尾びれの赤線が黒線に替わり、尾びれ先端の白い部分が伸びて長く垂れ下がった。⑥腹部の底には灯火のため

の蠟燭立てが付いていたが、現在ではなくなった。⑦蠟燭が出し入れしやすいよう、また着火がしやすいように、背部の穴は大きな長方形であったが、現在は小さな丸形の穴に変わっている。⑧「ちょうちん」の形を支える竹ひごの組み合わせは、横方向に前後2本の竹ひごを回して腹部に蠟燭立てを強く固定していたが、現在は蠟燭立てを設置しないため、2本から1本に減らしている。

それらの所々の変化を総合すると、蠟燭立てをなくして、電飾照明にしている。また、製作しやすいように簡素にしている。見た目の雰囲気は、可愛く愛嬌のある表情になり人気が高まっている。

佐藤医院に保管されていた上記の「金魚ちょうちん」は現在、柳井市しらかべ学遊館に保管されている。その「金魚ちょうちん」は亀岡町で看板業を営んでいた宮本定治氏か息子の美佐男氏の作品であろうと言われている。

7 人気が高まった「柳井金魚ちょうちん」

柳井津で「金魚ちょうちん」が広まった頃は、祭礼のお迎え提灯として、あるいはお盆の精霊送りの提灯として子供たちが持ち歩いたと言い伝えられている。提灯であるから、「金魚ちょうちん」の中に蠟燭を立てて、火を灯していた。宗教行事にともなう子供の携帯具として用いられていたが、子供提灯は燃えやすいことから風情を楽しみながらも、火災原因にならぬかと気懸りであったと思われる。現在では、蠟燭を立てない装飾用の民芸品へと次第に用途が変化している。

柳井では、お盆の帰省客の増加に合わせて、「金魚ちょうちん祭り」を開催している。白壁の街並みの軒先には「金魚ちょうちん」がずらりと並べて吊り下げられ、川縁や街路脇そして空き地には竿灯形やトンネル形に枠を組んでぎっしりと飾っている。吊り下げられた「金魚ちょうちん」は総数約2500個あり、見ごたえがあって好評を博している。街路では、大きな金魚を作って山車に載せて引き回し、交差点ではくるくると回転をさせる。山車を取り囲む市民の踊り手は、勢いよく跳ねる。青森の「ねぶた祭り」を模した趣向である。

昔は蠟燭の明かりで情緒を楽しんだものが、現在は電球を入れた電飾照明となり、幻想的な雰囲気から華やかで活気に満ちた光景へと変化した。来客を圧倒するために「金魚ちょうちん」を量産しなければならず、シルバー人材センターや様々な施設の協力を得て作成をしている。

柳井のみならず東京などにも進出し、スカイツリーや高級ホテルあるいは納涼船などに「柳井金魚ちょうちん」が飾られるようになって、全国的に知られるようになった。手づくりのために、需要が供給においつかず、お土産用の「金魚ちょうちん」がしばしば欠品となり、ご迷惑をかけている状況もある。